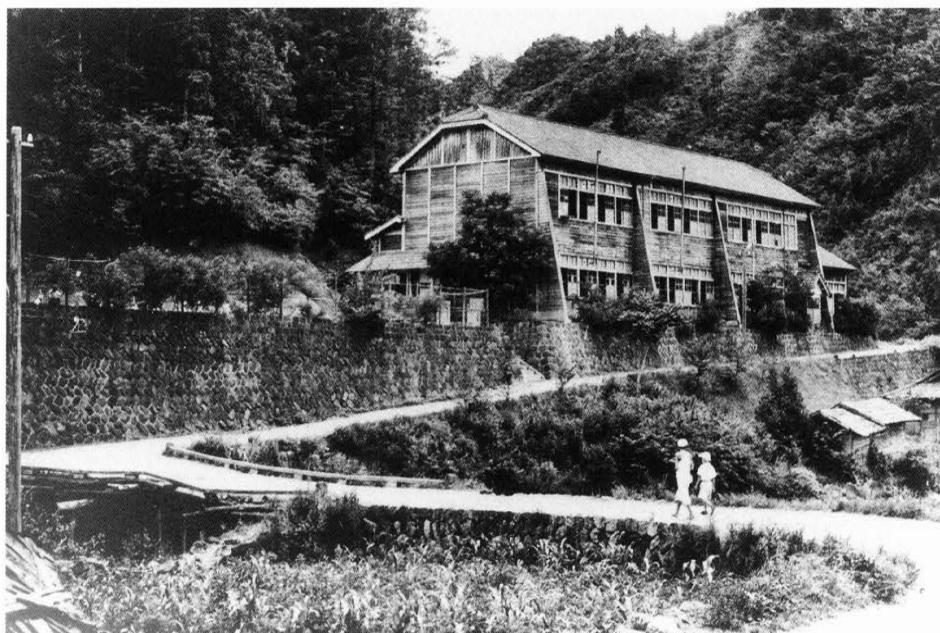


昭和40年 ～ 44年

1965～1969



かつて200人近い児童がいた笠方小学校はダム建設で校舎が湖底に

久万中に負けないゾ

面河洪草に剣道クラブできる

上浮穴郡面河村洪草地区に、このほど剣道クラブが発足、週三回一般、青少年が激しいけいこを続けている。剣道クラブの結成準備が始まったのは昨年末。自然美に恵まれていたが、少年たちの遊び場は学校の運動場か、神社、危険な河原がせいぜい。そのためか、児童の体位も劣っている。

そこで公務員中川和広さん、同竹田昇さん、宗末久万署洪草駐在所巡査らが地区民に働きかけ、全部の百二十戸から賛成を得て二十万円予定の寄付金が三十万円も集まった。これで防具、竹刀などをそろえ、四月末に発会式をした。

けいこ場は洪草中央公民館を使い、小学二年から中学三年まで女子を交えて、約六十人。週二回の一般の部は十五人と地区総ぐるみ。出席率も一〇〇%に近い。木村四段、正鑄初段ら五人が指導に当たり、二キも離れた家から参加する子供には、高岡慶徳さん、八幡春義さんから役員が車で送っている。

(昭和41年6月9日)



体育館狭しと練習する
面河村洪草剣道クラブ員ら

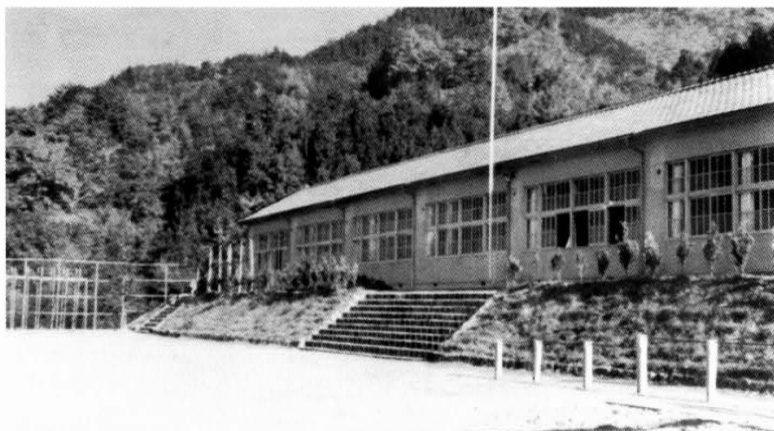
さようなら…学校

面河村笠方小閉校

笠方小の閉校は面河ダム建設の犠牲によるものでもあった。一時は面河村で規模が一番大きい学校で、児童も二百人近くいたが、三十八年、面河ダムが完成したとたん半減した。この際一部には他校に統合されるべきだとの声もあがったが実を結ばず、延び延びになっていた。

面河ダムの建設で同校区の中心地や同校舎が湖の底に沈み、一方では統合が実現しなかったため、村では校舎(八教室)を建てたり、運動場をつくって授業を続けてきた。しかしその後、ダム工事関係者が村を離れていったこともあって児童数は日増しに減少、四十二年度から全学級が複式授業という最悪の事態になって大勢が閉校に傾いていった。児童四十数人は四月から洪草小に進学することになるが、距離があるため児童全員、村の肝入りでバスを利用する方針。

児童らは閉校を記念して校庭に花壇をつくり、学校がなくなってもずっと花の世話をし、将来の思い出に残しておこうという計画もっている。(昭和43年3月26日)



閉校になった笠方小は、面河ダムの建設で4年前に新しく建てかえられたばかり

東光山薬師寺

面積からいえば伊予郡くらいあるといわれる広い面河村。山また山に囲まれ、ここに生きる人たちの生活条件は厳しいが、この中であつて一番大きい集落を形成しているのが葦草である。川沿いに村役場をはじめ郵便局、農協、森林組合などの建物がある。ところ狭しと並び、村の中心地になっている。

薬師寺は、この集落を見下ろす、二段高いところにある。この寺ができたのは昭和初年。初代の藤原楊州和尚は越智郡大三島に生まれ、幼くして出家した。広島県の瑞応山王林寺で二十七年間、住職を務めたが、本山に見込まれて上浮穴郡川瀬村(現在は久万町に合併)の定徳寺に派遣された。

隣村の柚川村(現在の面河村)は、面積において県内第二で、戸数にしても七百余戸、人口三千七百余人といわれ、大きい村だった。しかし、この村には、禅門信者が多数いながら、寺院の布教道場が全くなかった。このことを知った和尚は、当時の菅広綱村長、重見丈太郎村議に会い、布教寺院の設立を話し合う一方、一般に広く呼びかけた。この結果、四カ月後に設立の運びとなったのである。

全く新しい土地への寺院設立だけに、前途には数多くの困難が待ち受け、基盤ができるまでには、かなりの日時を要した。農家の別室や学校を借り、ここを布教道場にして急場をしのいだ。雨、露をしのぐ程度といった状況で、和尚自身、場合

によっては自分の持ち物を売り払うなど、寺を軌道に乗せるのに東奔西走した。村民も労を惜しまず全面的にバックアップ。村民と寺が一心同体となり、今日の姿を築いてきたといえる。

寺の新築に際しては、敷地から建築資材にいたるまで村民の提供によるものだった。住民が総出して、井戸も掘った。境内に植え込まれているサクラ、イチヨウ、ヒマラヤスギなど数多い木々や寺の一本をとってみても、何一つ村民の息がかかっていないものはない。

さらに昭和二十四年には、敗戦によって初めてお寺の基本財産ができた。在郷軍人会は、スギ、ヒノキを植林した二十餘ばかりの山を持っていたが、これが敗戦で解散し、村の手に渡った。村は、この土地だけを寺に提供、寺では、檀家の供出金七万二千六百円でこの立ち木を買い取った。

幼年林だったスギ、ヒノキはここ二十年の間にりっぱに成長し、今では時価二千万円以上とか。敗戦に続く農地改革で、多くの寺院は経済困難に陥ったが、この寺では、これが反対に今日の確固たる経営基盤をつくることになったのである。藤原訥堂住職(五)は「建物の改築などは、すべて山林からの収益によっており、今では寺を維持することに憂慮することはなくなった」という。

(昭和44年4月29日)



東光山薬師寺

人が減るシリーズ⑩ 上浮穴郡面河村

離村率は県下一

新築校舎も廃校の運命？

上浮穴郡面河村は典型的な過疎地帯。百五十七平方キロメートルと今治市の二倍以上の広さだが、人口は三千二百人(四十二年三月現在)。七年前には四千三百人もいたのに、千人以上も減ってしまった。県下一の減少率だ。なぜ減ったのだろうか。三年前、完成した県下最大の人造湖、面河ダムのため八十四世帯が水没地帯となり、ダム周辺や松山市近郊などに移り住んだ。もともと平地部が少ないところだから、長年、住みなれた土地を去る以外になかったのだ。

湖の水辺や水中に、かつての住家の土台が見える。このそばでジャガイモ畑を耕している中川源蔵さん(七〇)に会った。源蔵さんも水没世帯の一人。田畑がかなりあったが補償金七百万円をもって松山市石井に移った。だが「ふるさと」が恋しくて毎年、積雪時以外は帰郷、小屋で自炊しながら植林地の手入れや他人の耕地を手伝い、独り過ごしている。「昔はこのあたりに百七十戸も家があつて、にぎやかだった。それが八十戸に減った。私の子供は九人いたが戦死や若死にで三人しか残っておらん。家内も二十年前に死んだ……」生活費は戦死した子供の遺族年金で賄っているという。近くにわらぶきの廃屋があつた。ちよつと手入れすれば住めそうだが、内部は荒れ果てていた。隣家の林業、永井順一さん(三〇)は「終戦後に家を建てたらしいが、間もなく松山に移ったとか聞いた。三年前、二千万円かけて新築した笠方小学校

も児童数が減り、いずれ廃校になるのではないかとわさが出ています」という。

草原地区に行つてみた。観光客でにぎわう面河溪から南へ約三キロ。うち一キロは道幅も急坂。標高約八百メートル。急傾斜面に人家がへばりついてた。たつたの七戸。「これでもこの間まで三十戸はあつたのですよ。十年前は木炭ブームで景気がよかつたけど原木もなくなり、木炭も売れなくなつたので、山を降りる人が増えた。わたしも出たいけど、子供が四人いるし、行くところもないので我慢しています」と昔時尾さん(四三)はいう。主人は石鎚スカイライン工事で働いている。工事が終わつたらどうするのかという問いに「どうしようもありません」という返事が返つてきた。

同村の今年度一般会計予算は約五千万円。うち村税収入は一千万円。二千八百万円の交付税で財政を支えている。

しかも総人口の大半を占める農林業者の村税より営林署や役場職員など約百八十人のサラリーマンの納める村税の占める率が年々増えている。ということは農家の収入が少なくなつてきていることを示す。「青年団は三十七人。中学を出るとほとんどが村を出てしまう。割石地区の開拓地では養蚕熱が高まり、収入も

よいので離村者も少ないのですが、ほかの地区では年寄りばかりになり、これからどうなるでしょうね」と同村役場の中川正毅さん(三〇)。

同村は造林に適しているし、林野率も九七％。しかし、現実には村に住んでいる人たちの平均所有は一畝以下がほとんど、戦後の乱伐で幼齢林が多い。加えて村外に移っている人の所有林が増えている。面河溪にレジャーにくる都会人が陽気にさわぐのを横目に見ながら、同村に残っている人たちは生活に精いっぱい。過疎地帯の悩みは予想以上に大きかった。(昭和42年8月25日)



「昔はこもにぎやかだったがみんないなくなつた」とくすかけの家をながめながらひとり働く中川さん。向こうにみえるりっぱな笠方小学校も近く廃校になりそうだ。

面河に国民宿舎が完成

来月から店開き

上浮穴郡面河村が建設中だった国民宿舎「面河」はこのほど完成、六月一日から営業を始める。国定公園面河溪に建つこの宿舎は、鉄筋コンクリート、四階（部五階）、収容人員約百人、総工費約六千二百万円、郡内で最大の宿舎規模をもち、県下にある四つの国民宿舎の中でも最高の設備を備えたという。同村では面河溪の観光開発をさらに積極的に進める計画を立てている。

渓谷美を誇る面河溪は昔から多くの観光客を集めてきたが、最近国道33号線などの道路整備が進むに従って、県下はもちろん、高知、阪神、中国方面からもバス、自動車を連ねて来る客の数が急激に増え、昨年だけでも約二十七万人を上回ったという。だが二、三ある民営の旅館では約二百人の宿泊が限度。そこで同村が二千六百万円の国民年金特別融資のほか三千六百万円を捻出して宿舎建設に踏み切った。

五色橋のすぐ下流、五色河原沿いの絶好の敷地に昨年四月着工した宿舎建設には自然美を損なわないよう、立ち木の枝ひとつ切るにも気を配り、冬季の零度以下の寒気に、打ち込むコンクリートがすぐ凍るなど、難工事だった。完成した宿舎は延べ面積二四五・七平方メートル、全館暖房で、浴室も広く作ってある。グレーと白のツートンカラーのモダンな外装は前の五色河原、後方のパノラマの景勝と調和し、自家発電機、厨房などの内部機械設備を自動化したほか、夜具なども高級のものをそろえ、松山市の一流ホテルにも負けない



面河溪の自然美の中に完成したモダンな国民宿舎「面河」

ほどというのが村当局の自慢。宿泊費は二泊一食で大人九百円から千円、中学生七百元と安く、食事も山菜、川魚料理を主にするそうだ。

(昭和41年5月24日)

面河で県山村中堅青年の研修

七月二十五日から上浮穴郡面河村国民宿舎「面河」で開かれていた県主催の山村中堅青年林業教室研修会が二十九日終わった。今回で三回目、五十七人の研修生は実習を中心として、熱心な学習活動が続けた。とくに既婚者を含む女性三人が初めて参加、ともに学習したことは、今年四月、両陛下をお迎えした温泉郡久谷村での全国植樹祭をきっかけとした県民の林業への関心度の高まりをみせていた。

今回の総合研修は前二回が、松山市堀江で講義を主にしていたのを変え、県内随一の林業地帯、上浮穴郡で実習を重点とした。

(昭和41年7月30日)



熱心にこれからの林業を話し合う研修生たち

自然美の大観光地に

面河の「国民の森」起工式

来年迎える「明治百年」を記念して高知営林局が上浮穴郡面河村に設ける「国民の森」の起工式が、十二月二日午前十二時から同村面河溪で行なわれた。同森は林業知識の普及、自然保護と森林美の造成、レクリエーション施設の整備などを目的に、林野庁が全国で六カ所、四国で二カ所設置するもの。来年完成すると、自然美をフルに生かした大観光地になると関係者は期待している。

(昭和42年11月3日)

面河「国民の森」で明治百年の記念植樹

高知営林局が昨年十一月から二年計画で上浮穴郡面河村に造成している「国民の森」で、五日午前十二時から四国四県の関係者百五十人が出席して、明治百年記念植樹が行なわれた。

「国民の森」は林業知識の啓発普及、自然保護と森林美の造成、レクリエーション施設の整備などを目的に、林野庁が明治百年記念事業の一環として全国で六カ所、四国で二カ所設置するもの。国定公園「面河溪」を中心に、石鎚山(標高、九八二メートル)を含む国有林約千二百五十ヘクタールに、林産資源と国土保全の両機能を調和させ、さらに保健休養の場として利用してもらうため、計三千五百万円を投じ林業標本館、高山植物園、伐採状況を一望に収める展望台、キャンプ場などを新設。来年度完成予定の県営石鎚スカイラインとともに急増する観光客を収容する休憩室、駐車場、遊歩道などを整備して、訪れる人々に自然の美しさを満喫してもらうのが狙い。

この日の記念植樹は「国民の森」の造林を兼ねたもので、面河村大味川の猿谷山国有林で行なわれた。野村副知事、矢野県議会副議長らが出席、付近の国有林十三ヘクタールに、一昨行なわれた植樹祭で天皇、皇后両陛下がお手まきになったスギの苗木百五本を、出席者が一本ずつ丁寧に植樹した。

高知営林局ではこれに続いて、本県の林業試験場や松山営林署で育てたスギ、ヒノキの苗木九千二百本を二二ヘクタールに植えることにしており、これらの木は明治二百年まで保存される。(昭和43年4月6日)



「国民の森」の起工式(面河溪の鶴ヶ背橋)



「国民の森」で記念植樹をする野村副知事手前ら

危険な回り道も解消

溪谷に通学専用橋

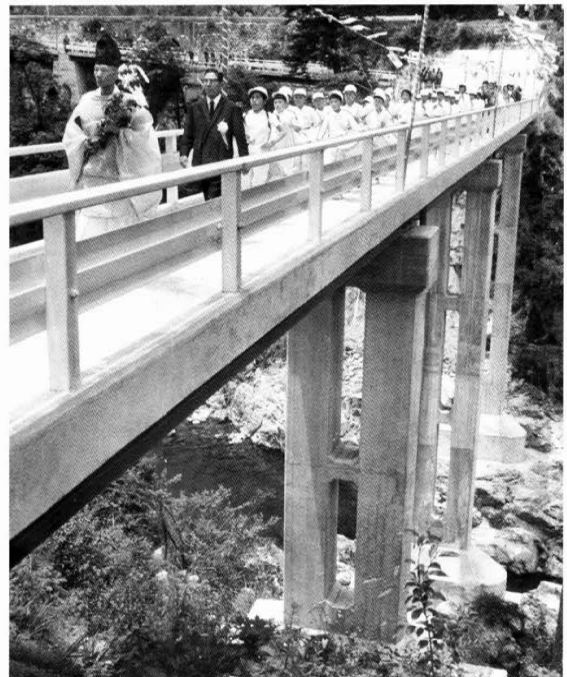
上浮穴郡面河村通仙橋の溪谷に面河第一小学校の父兄らが十数年来念願していた通学専用の永久橋が架けられ、六月二十日午前十二時から、同校校庭に関係者二百五十人が出席して落成式をした。この完成で本組地区の児童らは通学距離が二キロ短縮されることになる。

面河第一小(児童約百人)は、元の面河、城山両小学校が統合されて二十八年にスタートした。このとき新しい学校は同村通仙橋の面河側の地に移され、杉山を整地して校舎や運動場がつけられた。

学校の東側には木橋(幅三メートル、長さ四十メートル)ができ、この橋を通って児童たちは登下校していたが、同校の西の方向にあたる本組地区の児童たちは、この橋だと回り道することになり、通学距離も長くなるので不便だった。同地区の児童は全校児童の半数近くもおり、行楽シーズンともなれば面河溪に通じる県道西条―久万線を通って通学している同地区の児童は、面河溪に行き来する観光バスなどの交通ラッシュに合えば、しばしば立ち止まる状態で、危険でもあった。

このため同地区の父兄らは、統合の当初から安全で近道になる学校の西側に橋をつけてほしいと関係者に強く要望し続けてきた。同村でも児童数の減少などから四つある小学校を将来二つにまとめる方針を立て、これに備えて面河第一小学校の環境整備に臨むことになり、これら父兄の要望も入れて永久橋をつくることになった。新しい橋は四十二年度から工事に掛かっていたもので、長さ六十六メートル、幅二五メートル、コンクリート造りで、この橋から県道に至る間(百メートル)も地元から土地が提供され、通学道路として整備、危険防止からガードレールが付けられた。

(昭和43年6月21日)



通学専用橋を渡り初めする青木面河村長と面河第一小学校の児童ら

面河溪谷 交通ラッシュ緩和へ

歩行者に観光道路、幅員拡張工事急ピッチ

松山営林署は、秋の紅葉シーズンに車や人の列でまひ状態になる面河溪の混雑を解消するため、同溪内の観光道路の幅員を二倍程度に広げている。面河溪への探勝客は、最盛期には二日二万数千人、車七、八百台に上るが、関門から面河国民宿舎前までの観光道路・国有林道の幅員が三・六メートルと狭く、上り下りする車に観光客は危険にさらされていた。

これに対処して、通天橋から面河国民宿舎手前までの間(七百五十四メートル)で山手の岩石を切り取り、現在の国有林道の幅を六メートル程度に広げている。このうち通天橋から奥四百三十二メートルは、四十三年度事業として工費八百万円ですでに幅員拡張され、残りの分は四十四年度中に実施、完成させる計画。

(昭和44年5月24日)



人・車の混雑解消を図って拡幅された面河溪内の道路

1年8カ月ぶり満水

来年の田植え用水まずOK

上浮穴郡の面河ダムが七月四日早朝、満水になった。ゲートを閉じてから二年八カ月ぶりである。「西の愛知用水」といわれ農業、工業用水を供給し、電力までを生み出すこのダムは、二千八百三十万トの水を腹いっぱい飲みこんだ。

面河ダムは三十五年から工事にかかり、十九億二千八百万円をかけて完成、ことしの四月に完工式があった。

一昨年から貯水にはいったものの昨年は農業用水の末端水路ができていなかったため満水を避けて年越し、この四日午前五時十分、完成後初めて満水になった。

梅雨に入る前の水位は二十七ト。一カ月間に大雨が多く、二千八百三十万トの水が貯まった。満水後はゲートを約十センチほど越えた。この貯水量は毎秒一トの割で流しても三百十日かかり、ダムの水位を二ト上げるのに百万トの水がいる。同ダム用水管理事務所の話によると「今後の天気によって多少は変わるが、まず来年の田植え用水には事欠くまい」という。
(昭和40年7月6日)

水没家屋も顔出す

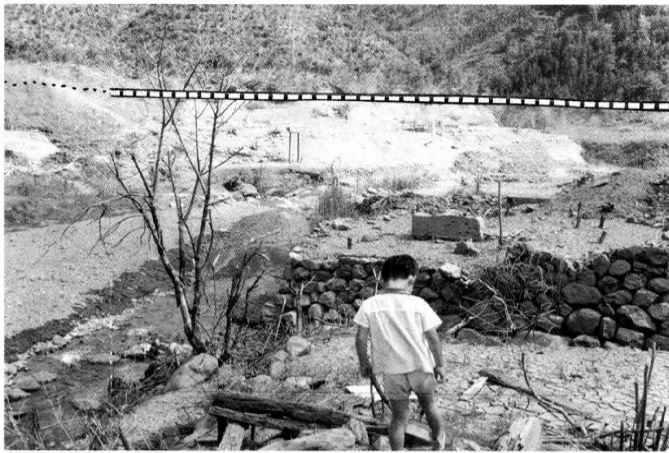
面河ダムほぼ干上がる

水不足にあえぐ道前道後平野への農、工業用水の供給源である上浮穴郡面河村柚野の面河ダムは、有効貯水量二千六百八十万トが九月二十三日には三百五十万トに減り、このまま降雨がなければ、あと二カ月くらいで全面送水不能となりそう。県下の有効貯水量を持つ人造湖も八分の七くらいが干上がり、ダムの規模からいえば、「たまり水」のよう。水没家屋の跡や田畑などが二年ぶりに次々と姿を見せてきている。このまま送水を続けければ、二十日間程度で底をつきそう。

(昭和42年9月24日)



水が自然の内懐を埋めつくし、せきを越して流れ出した面河ダム



干上がって水没した鳥居(中央)なども姿を見せた面河ダム(点線は満水位)

3年後完成目指す

石鎚スカイライン起工式

有料道路・石鎚スカイラインの起工式が四月二十六日、上浮穴郡面河村関門の同路線起点予定地に、久松知事ら関係者約百人が参加して盛大に行なわれた。

起工式には久松知事のほか野村副知事、済木県土木部長、明比県議会議長建設委員長(議長代理)、鳥生高知管林局長、村上石鎚スカイライン建設期成同盟会長、青木面河村長らが出席して、まず午前十二時から起点予定地につくられた祭壇で神事が行なわれ、久松知事のくわ入れのあと、関係者が玉ぐしをささげ工事の無事を祈った。

(昭和40年4月27日)



石鎚スカイラインの起点予定地でくわ入れする久松知事

雪の谷間につち音高く

石鎚スカイライン工事急ピッチ

上浮穴郡面河村関門―土小屋六・七キロを結ぶ石鎚スカイラインは、九月に着工以来約四カ月、工事は急ピッチで進み、四十年工事分の四〇％くらいを消化、四十三年四月中にも完成の予定である。

今年度分の工事目標は二千メートルで、二億円の予算で熊谷組(東京都)が九月初め着工、十七ト型ブルドーザ四台、作業員二百人を投入して工事を急ぎ、ルートはほぼ出来上がっている。起点からすぐ面河川に架かる第一橋(長さ三十六メートル、幅員六メートル)は、橋脚の建設がほぼ終わり、二月中旬にも概略完成する。

標高六百四十五メートルの起点から七百三十メートルまでヘアピン型に曲げ、二気に上げる道路は二応ルートができており、まだら雪の急傾斜山腹の一部ではコンクリート打ちや石積み工事がたけなわ。

七百三十メートルの地点では、延長百二十メートルのトンネル工事が行なわれており、四月中に、この第一トンネルの少し先まで舗装を除く工事が完成する。

(昭和40年12月28日)



土止めのためのコンクリート打ちや石積み工事もいまたけなわ

全コース開削終わる

完成後は松山から日帰り

昭和四十年から始まった石鎚スカイライン工事は、来春の開通を目指して大詰めを迎えている。瀬戸内海大橋の架橋と合わせて本県の観光開発の柱ともいえる石鎚スカイライン。県観光公社では、これに合わせて基地となる石鎚山系土小屋周辺を大観光地にしようと準備を始めた。今後どのような観光開発を計画しているのか現地を訪れている。問題点を探ってみた。

石鎚スカイラインが完成すれば、松山から面河を経て土小屋まで車で約二時間半で行ける。県では、四十年から三十二年で九億円の工費をかけ有料道路をつくる計画だったが、面河から土小屋にいたるコースが予想以上に岩盤も複雑、急峻で難航、ついに計画変更を余儀なくされた。現在は基礎工事を急ピッチで進め、すでに全コースの山の切り崩しを終え、工事は完工まで六〇―七〇%前後までにこぎつけた。全コースのうち六カ所にトンネル(最長冠山トンネル二百メートル)、七カ所に橋(最長金山橋六十五メートル)を設ける計画だが、傾斜がきついため予想以上に難航している。来春完成を目指している。

なんとといっても石鎚スカイラインのコースが国定公園内、文化財保護区域、保安林内にあり、ブナ、四国シラベなどの原生林をぬって登らねばならない。このため二万三千立方メートルの木材伐採という犠牲も払っている。

県観光公社の計画では、面河溪への観光客は三十五年ごろから増え、四十年には年間三十二

万八千人。その後、四十二年までの伸び率は平均三三%。四十四年の推定観光客は約四十五万人に達するとみられる。石鎚スカイラインが完成すれば、このうち七〇%を誘致できるものと推定。こうした観光客を受け入れる施設として、同公社の構想は現在のところ三期の工事で、宿泊施設は国民宿舎、簡易宿舎、そして展望台駐車場などを建設する計画が打ち出されている。

(昭和43年7月21日)



石鎚山を目の前に急ピッチに工事がすすむ石鎚スカイライン(土小屋から?)の地点で

舗装工事始まる

上浮穴郡面河村に建設されている石鎚スカイラインは、仕上げの段階に入り舗装工事が始まった。面河村関門から石鎚山系土小屋までの間(延長一七・六キロ)を結ぶ同スカイラインは、最近全線にわたって車が通れるようになった。この途中の金山谷など七カ所には橋(総延長二百メートル)が取り付けられ、側溝や落石止めなどの工事が現在急ピッチで進められている。

舗装工事は面河村関門のスカイライン入り口から始められ、十月末までにまず延長十二キロの区間を舗装する。残りは来年の雪解けを待って取り掛かり、四十五年八月までにすべて完成させることにしている。

(昭和44年9月13日)



舗装工事の始まった石鎚スカイライン(面河村関門のスカイライン入り口付近で)